

## 7 今津砲台跡

西宮市今津真砂町

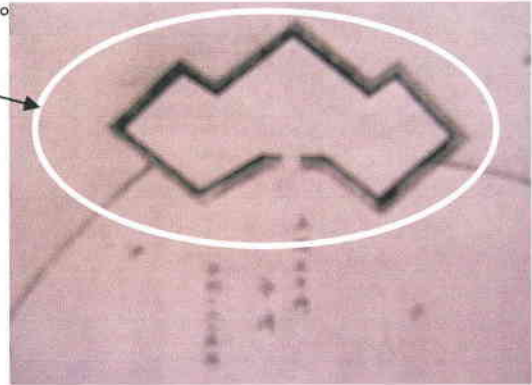
- ▶ 幕末期、外国船に対する防衛のため、摂海(大阪湾)防衛策として数箇所砲台を築くことになりました。軍艦奉行並 勝海舟は砲台の設置場所の調査をするため、文久3年(1863)2月30日に和田岬と湊川を訪れ砲台の設置場所を決め、翌日の3月1日、西宮及び今津の砲台設置場所を決めました。勝海舟日記に次のとおり記載されています。

『(前文省略)西宮海岸に到り、地所を定む。即日、大坂へ船行。(以下省略)』

西宮砲台と今津砲台の工事は、勘定奉行と大坂町奉行の支配下で進められ、台場掛には次のような幕府の役人が西宮に出張し工事を進めました。

- ・大須賀鎌次郎(大坂西町奉行与力)
- ・嶋田栄太郎(大坂西町奉行与力)
- ・林又七郎(勘定吟味役)
- ・矢口孝一郎(勘定方)
- ・榎本吉蔵(吟味方改役下役)
- ・郡司幸助(普請役)
- ・山内源太郎(普請役代り)
- ・田中鎌作(小人目付)

堅城方式



当初は和田岬砲台のような円形の砲台ではなく、舞子砲台に似た五稜郭のような堅城方式で進められていました。

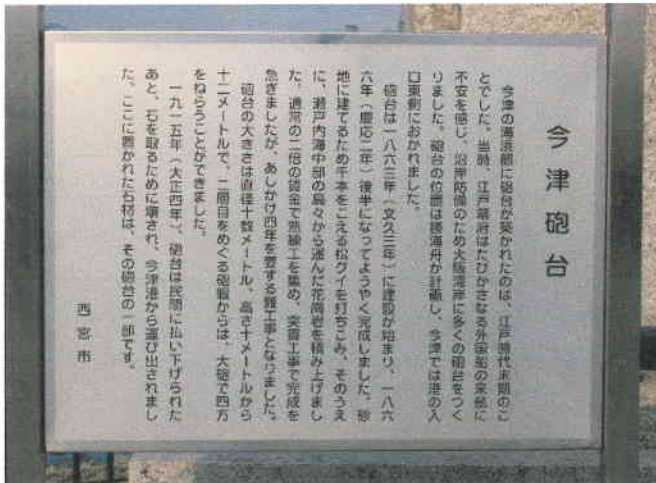
しかし、財政面が苦しいという理由で計画を縮小し、円堡に変更されました。

竣工は慶応2年(1866)後半だったようです。

砲台の大きさは直径10数メートル、高さ10~12メートルでした。

大正15年(1915)、砲台は民間に払い下げられ壊されました。

跡地に砲台の石を使った記念碑が建てられています。



## 8 長州藩兵(第二奇兵隊)宿営の地/信行寺

西宮市用海町1

- ▶ 長州藩は来る王政復古、討幕に向け着々と京都へ兵を進めていました。慶応3年(1867)12月1日から8日にかけて長州藩は西宮に滞陣しました。各隊ごとに分散し第二奇兵隊は信行寺にて宿営をしています。

### 第二奇兵隊

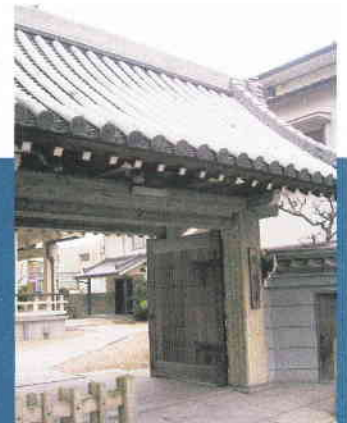
第二奇兵隊は南奇兵隊と鷹懲隊の別名でした。南奇兵隊の方では慶応元年(1865)にいくつかの諸隊が合併して編成されました。

総督に白井小助、軍監に世良修蔵が就任し、隊員数300~400名でした。

再編成の際に軍資金の問題から125名のリストラが行われ、隊員達の間で解雇反対の反乱事件など起こしていたそうです。

幕府との四境戦争では、大島口で戦っています。

その後、南奇兵隊は鷹懲隊と合併し、建武隊となって戊辰戦争を戦い抜く事になります。





## 9 長州藩兵(整武隊)宿営の地/正念寺

西宮市 本町1

- ▶ 信行寺の近くにある正念寺には、長州藩 整武隊が宿営しています。

### 整武隊

整武隊は慶応3年(1867)、御楯隊と鴻城隊が合併して整武隊となりました。

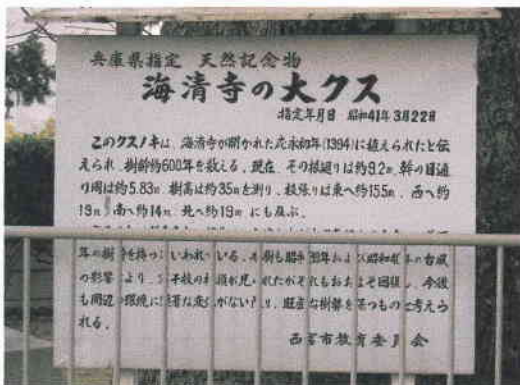
総督には山田市之允(顯義)が就任しています。山田は、鳥羽伏見の戦いで整武隊を率いて活躍しました。



## 10 長州藩兵(奇兵隊)宿営の地/海清寺

西宮市六湛寺町7-25

- ▶ 慶応3年(1867)12月1日、長州藩本陣が宿営した六湛寺の真向かいにある海清寺には、同藩の奇兵隊が宿営しました。



### 奇兵隊

奇兵隊は、文久3年(1863)に高杉晋作によって結成された民兵組織です。馬関海峡を通る外国船に砲撃した長州藩は、諸外国軍の強さを思い知らされました。兵力増強の為の臨時義勇軍として、身分の低い者でも入隊可能として結成されましたが、戦闘力が高かったことから、後に大村益次郎によって藩正規軍へと編入されます。その後、藩内の内戦、四境戦争、北越戦争と貴重な戦力として用いられました。

しかし、明治新政府樹立後、鎮台の設立に伴い奇兵隊は解散へ追い込まれてしまいます。

明治2年(1869)から翌年にかけて脱退騒動を起こして山口県庁を包囲します。

首謀者とみなされた大楽源太郎は九州の久留米へ逃れ、同士を糾合します。騒動は木戸孝允(桂小五郎)により武力鎮圧され、首謀者はじめ130人あまりが処刑されました。

奇兵隊では、高杉晋作のほか山県有朋、時山直八、赤根武人などがいたことが有名です。



## 11 長州藩本陣宿営の地(六湛寺跡) 西宮市六湛寺町10-3(西宮市役所)

- ▶ 慶応3年(1867)12月1日、長州藩は西宮の下町に兵を進め、いくつかの寺に分散して宿営しました。  
長州藩の本陣は、六湛寺に宿営し、しばらくここから京都の情勢を窺うことにしています。  
六湛寺は現存せず、跡地は西宮市役所となっています。  
名残として石碑と道標があります。



## 12 岩倉具視遺構の六英堂／西宮神社 西宮市社家町1-17

- ▶ 六英堂は岩倉具視邸の名称です。  
当時の建物がそのまま残っている貴重な史跡です。  
岩倉具視の私邸 六英堂は東京の丸の内の馬場先門にありました。  
明治6年の政変当時、しばしば木戸孝允、大久保利通、伊藤博文が訪れ密議を行っていたそうです。  
明治16年(1883)6月、岩倉は病によりこの六英堂で床に臥せりました。  
見舞いのため明治天皇、皇后両陛下が六英堂に足を運んでいます。  
同年7月20日、岩倉具視は養生の甲斐なく六英堂にて息を引き取りました。  
薨去後、宮内省が岩倉邸を買い上げ取り壊すようになっていたところ、  
宮内省御用掛の多田好問が請願して旧岩倉邸を譲り受けました。  
角筈村に移築して「隣雲軒」と名づけて保存が図られました。  
その後、渋谷に移転しています。  
多田好問の没後、所有者が川崎茂太郎(川崎造船社長)に移りました。  
大正11年(1922)7月、保存目的で川崎茂太郎の自邸である神戸の布引丸山(神戸市中央区布引丸山)に移築されました。  
名称も「隣雲軒」から「六英堂」に改称されました。  
岩倉具視、三条実美、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文ら6人の位牌と写真を祀った事から六英堂と名づけられました。  
その後、川崎氏の所有から離れ、神戸市の観光会社に移り、その会社より西宮神社に寄進されました。(昭和51年8月)  
位牌は今でも布引の徳光院に祀られています。



# 13 西宮砲台跡

西宮市西波止町

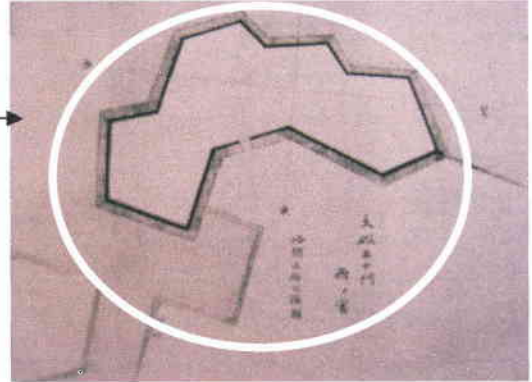
▶ 幕末期、外国船に対する防衛のため、摂海(大阪湾)防衛策として数箇所砲台を築くことになりました。軍艦奉行並 勝海舟は砲台の設置場所の調査をするため、文久3年(1863)2月30日に和田岬と湊川を訪れ砲台の設置場所を決め、翌日の3月1日、西宮及び今津の砲台設置場所を決めました。勝海舟日記に次のとおり記載されています。

『(前文省略)西宮海岸に到り、地所を走む。即日、大坂へ船行。(以下省略)』

西宮砲台と今津砲台の工事は、勘定奉行と大坂町奉行の支配下で進められ、台場掛には次のような幕府の役人が西宮に出張し工事を進めました。

- ・大須賀鎌次郎(大坂西町奉行与力)
- ・嶋田栄太郎(大坂西町奉行与力)
- ・林又七郎(勘定吟味役)
- ・矢口孝一郎(勘定方)
- ・榎本吉蔵(吟味方改役下役)
- ・郡司宰助(普請役)
- ・山内源太郎(普請役代り)
- ・田中鎌作(小人目付)

堅城方式



当初は和田岬砲台のような円形の砲台ではなく、舞子砲台に似た五稜郭のような堅城方式で進められていました。

しかし、財政面が苦しいという理由で計画を縮小し、円堡に変更されました。

正確な記録が残されていませんが、竣工したのは慶応2年(1866)の秋～冬頃だったようです。大砲2門と弾薬庫が設けられました。空砲を試射したところ、硝煙が堡塔内に充満し、実戦には使えないことが判りました。実際に使用されず明治維新を迎えました。

その後、明治17年(1884)に火災のため内部の木造構架を焼失しましたが、幸い石槨部分は築造当時の原型が残りました。

西宮砲台の土塁は破壊されたものの、円堡塔は残され、幕末当時の土木技術を知る貴重な史跡として、大正11年(1922)3月8日内務大臣指定史蹟として指定されています。

昭和9年の室戸台風による被害のあと屋根の復元工事が行われ、また昭和49年から50年にかけて鉄骨による石槨の補強工事賀され現在に至っています。

